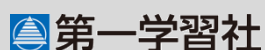


大学入学共通テスト について

大阪府立北野高等学校首席 穴井友知



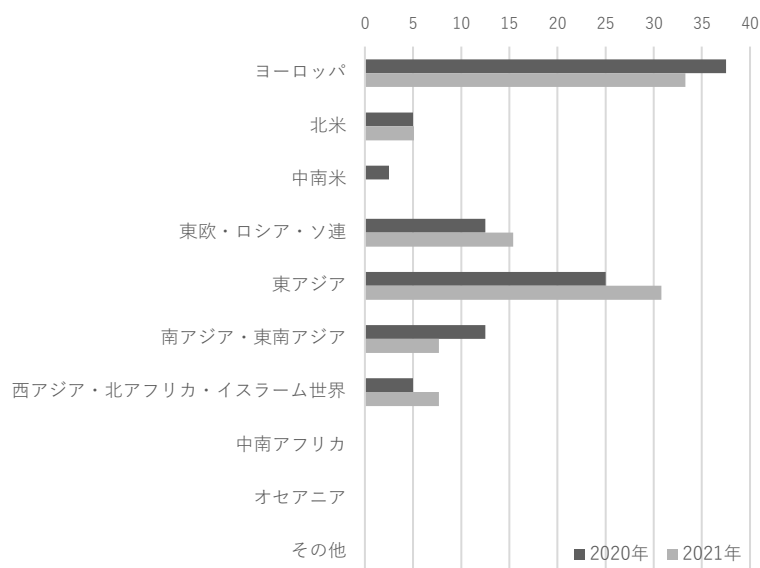
① 変化の概要

まず、最後のセンター試験と初の共通テストで出題地域・時代がどのように変化したか確認してみた。

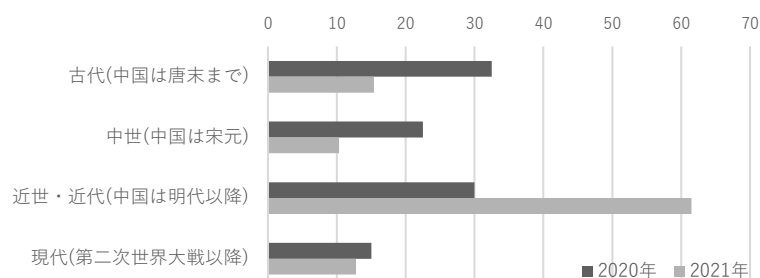
グラフに記載のとおり、出題地域に関しては大きな変化がなく、欧米諸国が5割強、アジア等が5割弱となっている。

一方、時代別の比率は今年度、かなり近現代に偏った。戦後史の問題も昨年に続いて多めで、グローバルな視点で世界史をとらえる意識を育成する必要がある。また、共通テストの試行調査段階から史資料の読み取りを重視する傾向が予想されており、利用可能な資料の豊富な近現代史の増加は、想定範囲内とも考えられる。新課程入試になれば、歴史総合+世界史探究がユニットで出題範囲となる見通しもあるため、このような時代の偏りは今後も続く可能性がある。

出題された地域の比率の変化



出題された地域の比率の変化



② 史資料のタイプと分量

試行調査の段階で予告されていたことではあるが、従来型の「(小問の内容にはあまりリンクしない)リード文を読ませて、下線部から小問に飛ぶ」方法は皆無となり、見事に史資料の読み取りに統一された。

	直接	間接
文書	16	6
地図		1
図版・写真		1
グラフ	2	
会話文	4	2
その他		2

その史資料のタイプを小問数で示すと、左のようになっていた。「直接」とは、解答番号1のように、史資料の内容や文脈を理解することが前提となる問であり、「間接」とは、解答番号2のように、史資料そのものや解説から派生的に出された問である。ごく一部であるが、解答番号14のように史資料との関係が薄い“従来型の小問”もみられたため、「その他」に分類した。

直接・間接の区別が難しいとはいえ、文書系資料(会話文を含む)を読ませる分量が多いことと、内容や文脈の理解に時間を費やす必要が大きいことが理解できる。教科書を読んだり、歴史用語を覚えたりするだけの学習で臨んだ受験生は難渋し、時間的にも切迫したと思われる。今回のような出題形式に慌てることのないよう、ふだんから短時間で史資料を読み取る集中力と、長文の文書資料からキーワードを発見するための基礎知識を育成しておきたい。

同じ表からもう1つ気づくことは、史資料のタイプが文書形式に偏り、グラフ・会話文・図版・地図の利用が意外に少なかったところである。センター試験の時代では、1つの小問を解くために費やす時間は地理が長く、世界史・日本史は短いのが常識であった。もし、各種史資料が満遍なく使用されれば、同様の傾向が続いたであろう。しかし、今回のように文書資料に偏ってくると、前述のように「時間切れ」の受験生が、世界史でも多発するのではないか。地図の使われた問題は1つだけあったが、その使用方法是従来型で、試行調査の問題でみられたような概念的利用ではなかった。ただし、近現代史においては利用可能な文書以外の史資料も豊富にあり、今後は様々な工夫を凝らした多様な出題が考えられる。教科書に掲載されている基本的な資料に加えて、図表・資料集の諸資料、教員が独自に提示する資料などに接する時間を増やすことで、教員だけでなく生徒自身が歴史的な方法論に触れる機会を設定してほしい。

③ 特徴的な問題

前述のとおり、ほとんどの小問で史資料の読み取りを要求されるため、一定の「スキル」や「慣れ」の育成が必要となる。しかし同時に、読み取りをクリアすれば、問われている事象そのものは基本事項が多い。

ここでは、今後の世界史の授業展開の参考となるような、共通テストらしい特徴的な問題をピックアップしてみたい。

■ 第1問A

古い新しいにかかわらず、歴史資料の解釈は難しい。史書であっても、常に真実が書かれているとは限らず、歴史を学ぶ学問的方法をストレートに大問化したといえるだろう。

解答番号1は従来なら、秦が基調とした政治思想とその内容を組み合わせて答えさせる形式になりそうだが、今回は2つの史書に登場する李斯の人物像の違いを表出している。小問を作るだけなら、どちらかの史書1つで足りるところに、あえて追加したのである。受験生からすれば、単純なことを回り道で聞かれているように思うかもしれないが、授業で李斯という人物を教える場面であれば、教科書の叙述をなぞって説明するよりも、司馬遷の『史記』を示したり、加えて「趙正書」を読ませたりする方が、生徒の興味を引きやすく、「その時代情勢の中の李斯」をイメージさせやすいのではないか。年間を通しての実施は困難であるが、時折、共通テストの形式を真似た授業展開も考えてみる価値がある。

解答番号3の問い方も特徴がある。一般的な司馬遷の「扱い」は、正史の紀伝体のあり方を整え、宮刑に処せられた屈辱に耐えながら『史記』を完成させた前漢武帝期の人物、という感じだろう。教科書や資料集でも、司馬遷に関するコラムはよくみられる。従来のセンター試験であれば、この小問の問い方は、“司馬遷の時代の皇帝の政策として適切なもの(or 不適切なもの)を選べ”くらいではないか。これをあえて文書資料の説明文に絡め、通常の授業では扱われることの少ない司馬遷の経済思想として問うたところに、単なる知識量の多寡を競わせまいとする共通テストの方針を感じる。今回の世界史の出題を眺めたとき、難易度の高い事象はほとんど問われていない。したがって、ふだんの授業においても、細かい事象を漏れなく扱う意識から、基本的な事項をじっくり多面的に理解させる手法への転換が求められる。

なお、第1問Bにも、Aと同様の雰囲気を感じられる。

■ 第2問A

グラフを用いた問が2つ続いている。

解答番号7を先に検討する。この問は、ナポレオン戦争の戦費調達に関連して、イギリスで紙幣の発行額が増えたことを確認するものである。もし、このグラフを授業で使うとすれば、どのように利用できるであろうか。例えば、紙幣発行量が急増する1780年代、いったん落ち着く1790年代、再び急増する19世紀以降に分け、それぞれの時期の英仏関係を整理してみるの、1つの方法だろう。また、第2次英仏百年戦争におけるイギリスの勝利の背景に「財政面の強み」があったことを、派生的に想起させるのもよいだろう。あるいは、解答番号6のグラフも並べて示し、紙幣発行と金貨発行の意味の違いを考えさせる、などもあり得る。共通テストがはじまって出題傾向が様変わりし、新課程に突入すれば、教員が授業で使う史資料を考えるのも大変な手間を要する。共通テストで実際に使用された資料を違った角度から眺める授業をしてみるのも、一案ではないか。

解答番号6は、金貨鑄造量が500万ポンドに達した1776年よりも前の出来事を問うている。この問を、「イダルゴ蜂起、ボストン茶会事件、トルコマンチャーイ条約、神聖同盟結成の各年号を問われている」と考えれば、2020年度(最後のセンター試験)の解答番号36と似ていることになる。しかし、本来の題意は、13植民地とイギリス本国の対立(独立戦争)に伴う金貨鑄造量の増加を読み取ることだろう。題意に沿ってグラフを見れば、1759年頃や1810年代の増加の背景も題材になり得ることが分かる。同時に、授業の題材としての利用法も想起できるのではないか。

■ 第2問B

解答番号9は、会話文の空欄を埋めるという視点で見れば、16世紀の中国の税制を問うているに過ぎない。しかし、選択肢の①～④を見ると、銀に関するテーマ史になっている。一条鞭法や地丁銀制を一国史の観点からとらえている生徒と、グローバルなテーマ史としてイメージできている生徒では、基本事項の定着度合いも変わってくる。1つの歴史的事象をどのような視点でとらえるべきか、教員側の力量も問われている。

■ 第3問

Aのような文芸作品や、Bのような“日本人が見た世界”のような資料は今後も多用されるのではない。法律文書などと違い、文芸作品には著作者の思想が反映されやすく、日本人の書いた資料の場合には率直でありながら独特のバイアスを含んだ表現も含まれるので、ある程度慣れておきたい。歴史総合が導入されれば、日本史的資料も題材に加わる可能性がある。

解答番号の13の病名の判断は単純だが、X～Zの正誤判定は共通テスト独特である。Yは封建社会の崩壊に関する重要な史実、Zは時代がおかしい、という判断がすぐにできるものの、Xの正誤は『デカメロン』を読まないと決められない。リード文を読み飛ばして小問だけ解くという方法が通用しないから、集中して素早く資料を読むことが求められる。

解答番号16も新傾向といえる。従来のセンター試験でも穴埋め問題はあったものの、長いリード文に1つだけ空欄が見られる程度であった。しかし今回は、“覚醒を促す”の意味と“覚醒を防遏する”の意味を、正確に読み解く必要がある。さらに前提として、19世紀後半のロシアの農村の様子、および、これとつながる社会主義的な思想の芽生えに関する知識が必要となる。知らないと解けないのは当然だが、単に知っているだけでもダメ、という方針を象徴するような凝った問である。

授業で学んだ知識と、その場で示された資料から読み解いた事象を組み合わせるという意味では、解答番号18や19も良問といえるだろう。

■ 第4問A

19世紀後半以降のロシアの南下政策に伴う、バルカン半島の状況を問うている。条約文書と地図を用いて、比較的シンプルな問い方であるが、共通テストの新傾向に合わせて史資料を多用した授業展開を考えるのであれば、まず、このくらいをめざすとよいのではないか。授業時間の制約や生徒の理解力を加味して、持続可能な範囲の資料利用、教材研究を進めたいところである。

■ 第4問B

ベトナム戦争の泥沼化に伴うアメリカ外交の変化は、ニクソン訪中、訪ソという大転換をもたらし、日中国交正常化にも影響を与えた。これらの重要事項について、資料X～Zを利用して問うたのが解答番号23～25である。第4問Aと同様、そのまま現代史の授業展開に転用することもできるが、Aに比べると資料そのものが「重く」、史実の展開もやや複雑であるから、年間を通して同じレベルを維持するのは難しいだろう。

■ 第4問C

第3問と同様、文書資料や会話文を読んで得られる情報と、授業で得た知識を組み合わせる問題。基本的かつ国語的読解力と、これを本番で発揮する集中力が問われる。

■ 第5問A

第5問も他の大問と同様、いろいろと工夫した出題である。それぞれの地域の説明文にキーワードが多くあるので、シチリア島、ロンドン、アテネと判定するのは、さほど難しくはないだろう。しかし、解答番号31でローマ帝国領になった順番を問われると焦るかもしれない。ローマ帝国史の一般的な授業であれば、領土の拡大の地図と年表を見ながら、それぞれの時代の帝国(ローマ)の状況を理解していく。年表も地図もない中で、史実を想起して並べ替えるのは新傾向といえる。

■ 第5問B

解答番号33は、朝鮮では、清代以降も朱子学の伝統が守られたこと、陽明学派の王守仁が朱子学を批判したことを知ったうえで、会話文との整合性をとる必要がある。何を問われているかを把握するまでに一手間余分にかかる。

④ 今後の展望と対応策

以上を踏まえて、今後の世界史の授業展開で考慮すべき点をもう一度整理してみたい。

まず、ふだんの授業でも史資料を効果的に用いることが求められる。限られた時間で、文書の中からキーワードを見つけ出す集中力を養うことで、本番での対応力をつけるとともに、「単に知るのではなく、知るまでの過程が面白い」ということに気づかせたい。

とはいえ、すべての授業について効果的な資料を見つけ、教材研究を進めることは困難である。これから共通テストが回を重ねていくので、実際に使用された史資料を異なる視点から解説したり、大問の構成をうまく授業展開に取り入れたりすることも考えてみたい。

結局のところ、教員は教材研究をする人、生徒は効率よく学ぶ人という固定概念を捨てるべきかもしれない。様々な史資料から歴史を再構成する教材研究は歴史学の方法を踏襲しているのであり、これは大変面白いものである。資料を提示して、その意味を生徒に考えさせながら史実に迫る授業展開は、生徒と本当の面白さを共有することにつながる。

本分析資料のほか、他教科・他科目の分析資料(PDF)もダウンロードできます。



 **第一学習社**

広島本社

733-8521 広島市西区横川新町 7-14

TEL 082-234-6800